

令和7年度 播磨町郷土資料館 特別展

大中  
遺跡の

# 新発見

— 継承されていく大中遺跡研究 —



令和7(2025)年 播磨町郷土資料館

# ごあいさつ

昭和37(1962)年に大中遺跡が発見されて以来24次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代の遺構や遺物が多数発見されました。これらの成果から、昭和42(1967)年には国指定史跡に指定されました。その後、遺跡公園として整備が進められ、現在では多くの方々に親しまれています。

本展では、令和3(2021)年度から開始され、現在も継続して行われている大中遺跡出土遺物見直し作業の成果に主軸を置いて紹介することで、ご来館の皆様が大中遺跡の新発見をご覧いただけます。同時に、近年の文化財保護活動における成果や寄贈された新資料も紹介します。

また、今春逝去された大中遺跡発見者の一人である浅原重利氏について追悼展示を行い、町の文化財保護・啓発活動に多大な貢献をされたその足跡を、同氏による採集遺物を中心に紹介します。

本展を通して、現在まで大中遺跡を継承してきた先人たちの熱意と最新研究成果に触れていただき、これまで以上に大中遺跡をはじめ播磨町の文化財に興味を持っていただければ幸いです。

最後になりましたが、本展にご協力賜りました関係機関と各位にお礼申し上げます。

令和7(2025)年10月 播磨町郷土資料館 館長 水野 洋子

## 例言・凡例

- この冊子は、令和7(2025)年10月4日(土)～令和7(2025)年11月30日(日)に開催する特別展「大中遺跡の新発見—継承されていく大中遺跡研究—」の展示図録である。
- 展示品については、別紙目録に所蔵先・点数等を記載した。
- 本展は大川康裕(当館学芸員)が主担当し、寺西梨紗(当館整理員)が補佐した。
- 本文の執筆は以下の通りである。
  - 大中遺跡のはじまり、大中遺跡発見から今日までの歩み、大中遺跡出土遺物見直し作業、見直し作業による新発見、播磨町の文化財保護活動、浅原重利氏を偲ぶ(冒頭)、まとめ 大川康裕
  - 浅原重利氏を偲ぶ「浅原重利氏 論文紹介 大中遺跡との出会い—その発見の経緯—」 浅原重利
- 復元イラストはアプライドアート工房 小東憲朗が、土器イラストは藤川千尋が作成した。
- 展覧会の開催にあたっては、後述の機関並びに個人の方々にご協力・ご援助を賜りました。記して感謝の意を表します。(50音順、敬称略)

## 協力機関

明石市立文化博物館、加古川市文化財調査研究センター、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター、兵庫県立考古博物館、広島大学総合博物館、守山市教育委員会

## 協力者

石丸恵利子、稲原昭嘉、島津寛子、深井明比古、深江英憲、藤原清尚、藤原怜史、森岡秀人、山中リュウ

## 目録掲載主要土器 器種一覧

### 9 絵画土器「龍」(7ページ)

資料	9-1	9-2	9-3	9-4	9-5	9-6	9-7	9-8	9-9	9-10	9-11	9-12	9-13	9-14
器種	広口壺	広口壺	壺か	長頸壺	壺	小型壺	甕	壺	大型甕	壺	壺	長頸壺	長頸壺	壺
部位	胴部上半	胴部上半	胴部	胴部上半	胴部上半	胴部	胴部上半	胴部上半	頸部下	胴部上半	口縁内面	胴部上半	頸部	胴部上半

### 10 絵画土器「巫女」(7ページ)

資料	10-1	10-2
器種	壺	壺
部位	胴部上半	胴部上半

### 11 絵画土器その他(8ページ)

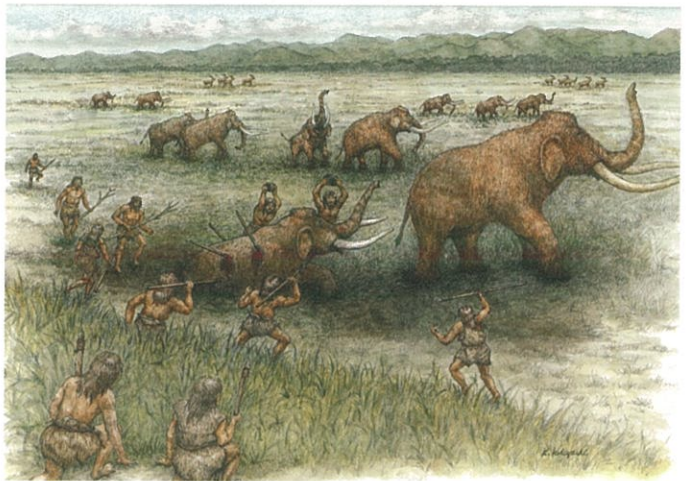
資料	11-1	11-2	11-3	11-4	11-5	11-6
器種	甕	壺	壺	広口壺	短頸壺	広口壺
部位	胴部上半	胴部	胴部上半	頸部	胴部下半	頸部内面

### 12 他地域との交流を示す土器(8ページ)

資料	12-1		12-2	12-3	12-4	12-5	12-6
器種	台付短頸壺または台付無頸壺		高坏	高坏	甕	壺	手焙形土器
部位	頸～胴部		脚部	坏部・脚部	胴～底部	口縁部	覆部・体部

# 大中遺跡のはじまり

土器が発明されていない2～3万年前は氷河期で、瀬戸内は陸地となっていました。旧石器人は石器を木にくくりつけて狩りの道具を作り、季節移動するナウマンゾウやオオツノジカなどの狩りをしました。動物たちは季節移動する際に、大中遺跡・やまのつえ山之上遺跡の西側の低い場所を通ることを旧石器人は知っていたのでしょうか。けもの道に大きな穴を掘り、沼のようにしてそこにはまったナウマンゾウを全員が力を合わせて仕留めたことでしょうか。



1 ナウマンゾウを狩る旧石器人(小東憲朗 当館蔵)

## 大中遺跡 発見から今日までの歩み

大中遺跡は昭和37(1962)年6月に、中学生だった<sup>あさはらしげとし おおつじしんいち おおつじょうじ</sup>浅原重利、大辻真一、大辻要二の3名により発見されました。当時彼らの遊び場であり、土器がたくさん出てくる「秘密の遺跡」であったその場所は、新聞に大きく取り上げられ、関係者の尽力により大中遺跡と名付けられ保存されました。その後、昭和37(1962)年12月から平成27(2015)年までの24次におよぶ発掘調査や整理作業が行われました。

発掘の結果、当遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭に栄えた集落遺跡で、広さは8万㎡、竪穴住居跡は140棟以上の存在が確認され、大型や小型、円形、方形、長方形、多角形など、あたかも弥生時代の住宅展示場のように様々な形があることがわかりました。また、大量の土器とともに<sup>ないこうかもんきょうへん とりがたどせいひん ががみがたどせいひん</sup>内行花文鏡片、鳥形土製品、鏡形土製品、鉄製品などが出土し、本遺跡の大きな特徴として捉えられています。その後、『播磨大中』『大中遺跡の研究』など多数の調査成果報告書が刊行され、昭和42(1967)年には国史跡に指定されました。現在では、播磨町のシンボルとして皆様に愛され、文化財保護継承の場としても使われています。

また、兵庫県立考古博物館では平成30(2018)年から「大中遺跡調査研究活用プロジェクト」を開催実施してきました。明石川から加古川下流域の同時代の遺跡を考察した結果、大中遺跡が最も大きくなった弥生時代後期は自然災害、人口増加などにより周辺集落などが安全で広い場所に移ってきた可能性もあることなどがわかってきています。

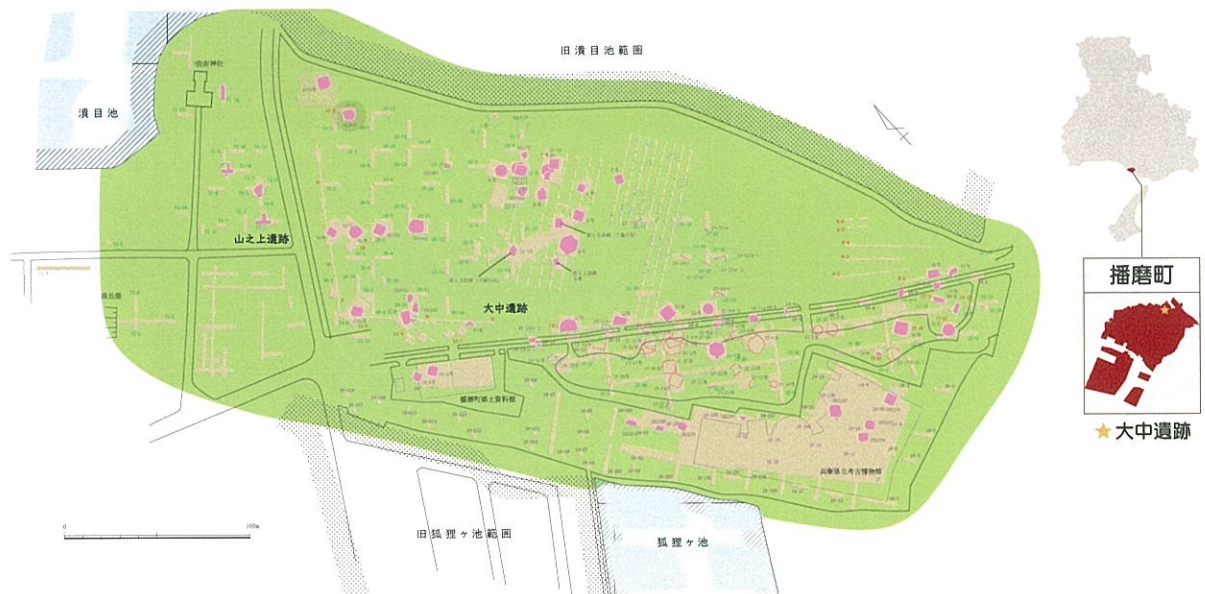
令和3(2021)年からは大中遺跡出土遺物の見直し作業を開始し、「籠」<sup>りゅう</sup>、「巫女」<sup>みこ</sup>を想起させる絵画・記号土器などが発見され、改めて当遺跡の存在感を強く示しました。

令和6(2024)年には、弥生時代後期の大中遺跡における眺望分析を行い、低位段丘に立地していながら高地性集落に匹敵する眺望域を持ち、見晴らしの良さが持つ意味について新たな疑問が投げかけられました。

現在も出土遺物の見直し作業は進められており、新発見は続いています。



2 大中遺跡に関する刊行物



### 3 大中遺跡・山之上遺跡で見つかった住居跡(『弥生集落転生—大中遺跡とその時代』2022 兵庫県立考古博物館を一部改変)

#### 研究の足跡

🔍 調査 📄 報告書 🌟 出来事 🏠 展示会等

1962.6.24 播磨中学3年生3名(浅原重利氏、大辻真一氏、大辻要二氏)により大中遺跡発見

#### 1962~1997年

- 1962 🔍 第1次調査(播磨町)
- 1963 📄 第1次調査『大中遺跡第1次調査略報』(播磨町)  
🔍 第2次調査(播磨町)、第3次調査(播磨町)  
📄 第1~3次調査『大中遺跡調査略報』(神港高等学校)
- 1964 🔍 第4次調査(播磨町)、第5次調査(播磨町)
- 1965 📄 第1~3次調査『播磨大中』(播磨町)  
🔍 第6次調査(播磨町)、第7次調査(播磨町)
- 1966 🔍 第8次調査(播磨町)
- 1967 🔍 第9次調査(播磨町)  
🌟 国史跡に指定
- 1971 🔍 第10次調査(播磨町)、第11次調査(播磨町)
- 1981 🔍 第12次調査(播磨町)
- 1984 🔍 第13次調査(播磨町)、第14次調査(播磨町)
- 1985 📄 第14次調査『播磨大中遺跡発掘調査報告書』(播磨町)  
🌟 播磨町郷土資料館開館(播磨町)
- 1986 🔍 第15次調査(播磨町)
- 1987 🔍 第16次調査(播磨町)
- 1988 📄 第16次調査『播磨町大中遺跡発掘調査の概要』(播磨町)  
🔍 第17次調査(播磨町)  
🏠 郷土資料館特別展『邪馬台国時代の鏡・土器・墓』(播磨町)
- 1990 📄 第1次~12次調査『播磨町大中遺跡の研究』(播磨町)
- 1992 🏠 郷土資料館特別展『弥生物語 — 土器が語る大中遺跡 —』(播磨町)
- 1996 🏠 郷土資料館特別展『大中遺跡の時代』(播磨町)
- 1997 🔍 第18次調査(播磨町)  
📄 第18次調査『播磨大中遺跡』(播磨町)

#### 2001年~

- 2001 🏠 郷土資料館特別展『大中の古代人』(播磨町)
- 2002 🔍 第19次調査(播磨町)
- 2003 🔍 第20次調査(播磨町)
- 2004 🔍 第21次調査(播磨町)  
📄 第19・20次調査『大中遺跡』  
🔍 第22次調査(播磨町)
- 2005 🔍 第23次調査(播磨町)  
🔍 山之上 第1次調査
- 2006 🔍 山之上 第2次調査
- 2007 📄 第23次・山之上第1次調査『大中遺跡Ⅱ・山之上遺跡』(兵庫県)  
🏠 郷土資料館特別展『弥生時代の子どもたち』(播磨町)  
🌟 兵庫県立考古博物館開館(兵庫県)  
📄 第22次『大中遺跡Ⅲ』(兵庫県)
- 2009 🔍 山之上 第3次調査
- 2010 🏠 郷土資料館特別展『オポナカムラとその時代』(播磨町)
- 2012 🏠 郷土資料館特別展『ひょうご弥生のムラ』(播磨町)
- 2015 🔍 第23次調査(播磨町)
- 2016 🏠 郷土資料館特別展『オポナカムラの生業』(播磨町)
- 2017 🏠 郷土資料館企画展『大中遺跡「再」発見!』(播磨町)
- 2018 🔍 大中遺跡調査研究・活用プロジェクト(兵庫県)
- 2022 🏠 郷土資料館企画展『大中遺跡のはじまり』(播磨町)  
🏠 県立考古博物館春季特別展『弥生集落転生』(兵庫県)  
🏠 郷土資料館特別展『大中遺跡の祈りとくらし』(播磨町)
- 2023 📄 『大中遺跡調査研究・活用プロジェクト成果報告』  
兵庫県立考古博物館紀要16(兵庫県)  
🏠 郷土資料館特別展『大中遺跡の土器群』(播磨町)
- 2024 🏠 郷土資料館特別展『復元イラストから読み解く、  
大中遺跡と明石海峡・播磨灘を望む遺跡』(播磨町)
- 2025 📄 『兵庫県における弥生時代後・終末期の絵画・記号土器  
集成と意義』兵庫県立考古博物館紀要18(森岡・深井・大川)  
🏠 郷土資料館特別展『大中遺跡の新発見』(播磨町)

#### 4 研究の足跡

# 大中遺跡 出土遺物の見直し作業

見直し作業は、令和2（2020）年、郷土資料館倉庫裏に積まれていた遺物コンテナ 93 箱の中から「龍」を象った絵画・記号土器が発見されたことがきっかけとなり始められました。

作業は、ボランティアやトライやるウィーク（職業体験）の中学生により細かな土器片までも丹念に水洗いされた遺物を、学芸員が一点一点確認し、土器作成時の調整痕や傷など土器に付された様々な痕跡の中から、ヘラなどの工具により意図的に描かれた絵画・記号土器や、大中の土ではなく他地域の土で作成された土器、他地域の形態様式を有する土器などを選別するという、とても地道な作業を繰り返していきます。


水洗い時、土器にヘラで描かれた痕跡（ヘラガキ）を発見したボランティアの方やトライやるウィークの生徒は、とても嬉しそうに誇らしげで、目を輝かせ楽しんで作業されていることがうかがえました。

## 見直し作業協力者

令和3（2021）～4（2022）年度		令和5（2023）～6（2024）年度	
播磨町郷土資料館 ボランティア	牛島三夫、古川一、溝口操	播磨町郷土資料館 ボランティア	牛島三夫、古川一、溝口操
兵庫県立考古博物館 ボランティア	影山静男、加藤真由美、坂井勝代、佐藤修三、高橋宏、 寺田文男、中川恵子、林信吾、増田倫敏、松岡信孝、 山岸一男、山本裕恒、和辻義昭	播磨町立播磨中学校トライやるウィーク参加生徒 16名	
播磨町立播磨中学校トライやるウィーク参加生徒 8名			


## 5 大中遺跡見直し作業協力者一覧

## 見直し作業の手順




6-1 遺物洗浄

遺物にこびり付いた土を慎重に洗浄除去し、十分に乾燥させます。



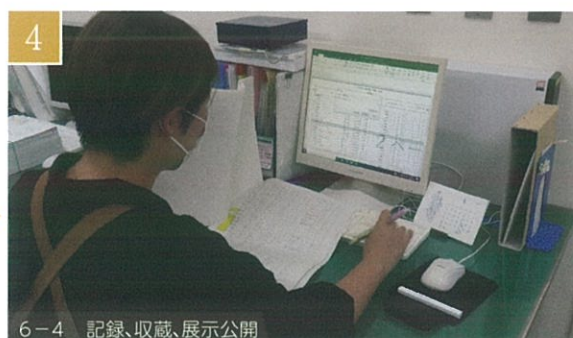
6-2 遺物抽出1

学芸員により、絵画・記号土器など特異な遺物を抽出します。



6-3 遺物抽出2

更に専門的な学芸員により、考古学的な位置付けを最終決定します。



6-4 記録、収蔵、展示公開

詳細を台帳に記録し、収蔵庫で厳重に保管します。

## 6 見直し作業の手順

# 見直し作業による新発見

## ■ 絵画・記号土器

絵画・記号土器とは、弥生時代中期に出現した具象的な「絵画土器」が、後期にかけて抽象化し、更に記号化したものです。「龍」、「巫女」など画題が把握できる記号もあれば、把握できない記号も多数発見されています。絵画・記号が施される器種は壺で、胴部に施されることが多く、技法は、ヘラを使用する「ヘラガキ」、竹管や棒などを使用した「刺突」が見られ、金属のような鋭利なものを使用した線刻も確認されています。



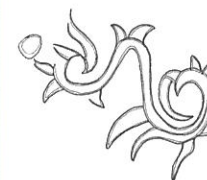
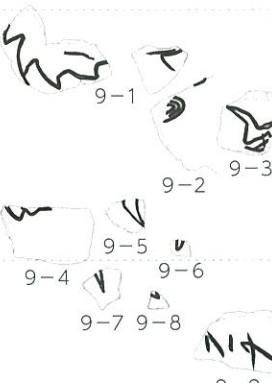

発見された127点の絵画・記号土器片のうち、画題が断定または想定できるものとして「龍」14点、「巫女」2点、「稲妻」2点、「鳥」2点が、画題が断定できない記号107点が確認されました（令和7（2025）年9月時点）。

なかでも「龍」を象るものが最も多く見られるのが、本遺跡の特色の1つと言えます。「龍」は古来より天候を司る神として崇められており、「稲妻」も降雨、水を想起させる画題です。稲作の発展により、干ばつや洪水は脅威であり、それら水に関わる天災を忌避し、豊穡を祈願する祭祀が行われていたと考えられています。本遺跡の土器に描かれた「龍」、「稲妻」も、こうした祭祀に用いられたものと想定されています。


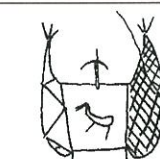


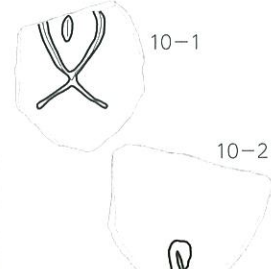
「巫女」は弥生時代中期には「鳥装」など全体像を具象的に描いていましたが、後期にかけての記号化に伴い、女性器のみを象り「巫女」と同義としていました。また巫女は「シャーマン」とも言い、呪術による祈祷などの祭祀を司る人物であり、「龍」などと共に祭祀的な要素を強く持つ一群に含まれます。

「鳥」を象る記号として「三叉文」があり、抽象化の過程で鳥の足や足跡が記号化したものです。鳥は「鳥装の巫女」にみられるように、神聖な生き物として信仰されていたようです。

画題が断定できない記号についても、何らかの形象が抽象化、記号化したもので、意味を持つものと考えられます。

龍の変遷		
	 <p>中国鏡の龍 千石コレクション 渡金方格規矩四神鏡龍</p>	
	畿内各地	大中遺跡
具象化	 <p>池上曾根(大阪府)</p>	
抽象化	 <p>八尾南(大阪府)</p>	 <p>9-1 9-2 9-3 9-4 9-5 9-6 9-7 9-8 9-9 9-10 9-11 9-12 9-13 9-14</p>
記号化	 <p>池上曾根(大阪府)</p>	

7 龍の変遷イメージ

巫女の変遷		
	 <p>巫女イメージ 〔女性シャーマン〕:小東憲朗 当館蔵</p>	
	畿内各地	大中遺跡
具象化	 <p>清水風</p>	
抽象化	 <p>唐古a</p>	
記号化	 <p>唐古c 中曾司 唐古b</p>	 <p>10-1 10-2</p>

8 巫女の変遷イメージ



9-1



9-2



9-3



9-4



9-5



9-6



9-7



9-8



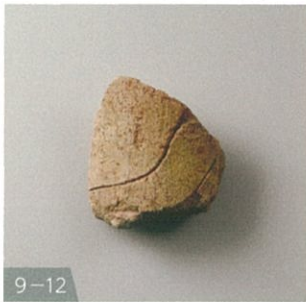
9-9



9-10



9-11



9-12



9-13



9-14

9 絵画・記号土器「龍」



10-1



10-2

10 絵画・記号土器「巫女」





11-1 稲妻



11-2 稲妻



11-3 「T」字状



11-4 一本線



11-5 楕円状



11-6 竹管による刺突

### 11 絵画・記号土器 その他

## ■ 他地域との交流を示す土器

発見された土器の中には、土器製作技法や、土器の胎土（土器の材料となる粘土）が大中遺跡のものとは異なる資料があります。これら进行分析し産地を推測していくと、大中遺跡の交流範囲が徐々に見えてきます。これまでは東は河内（大阪府）、西は吉備（岡山県）、南は讃岐（香川県）、北は丹後、丹波（兵庫県北部）を中心とする日本海側から山陰までと考えられていました。見直し作業において、近江（滋賀県）の野洲川流域を産地とする土器が発見され、当域にまで範囲が及ぶことがわかりました。また、発見された近江産の土器は「手焙形土器」という祭祀に用いられたと考えられる特殊な土器であることから、首長間などの上層部での交流があった可能性がうかがわれます。



12-1 因幡・丹後・丹波



12-2 丹後・丹波



12-3 吉備



12-4 讃岐

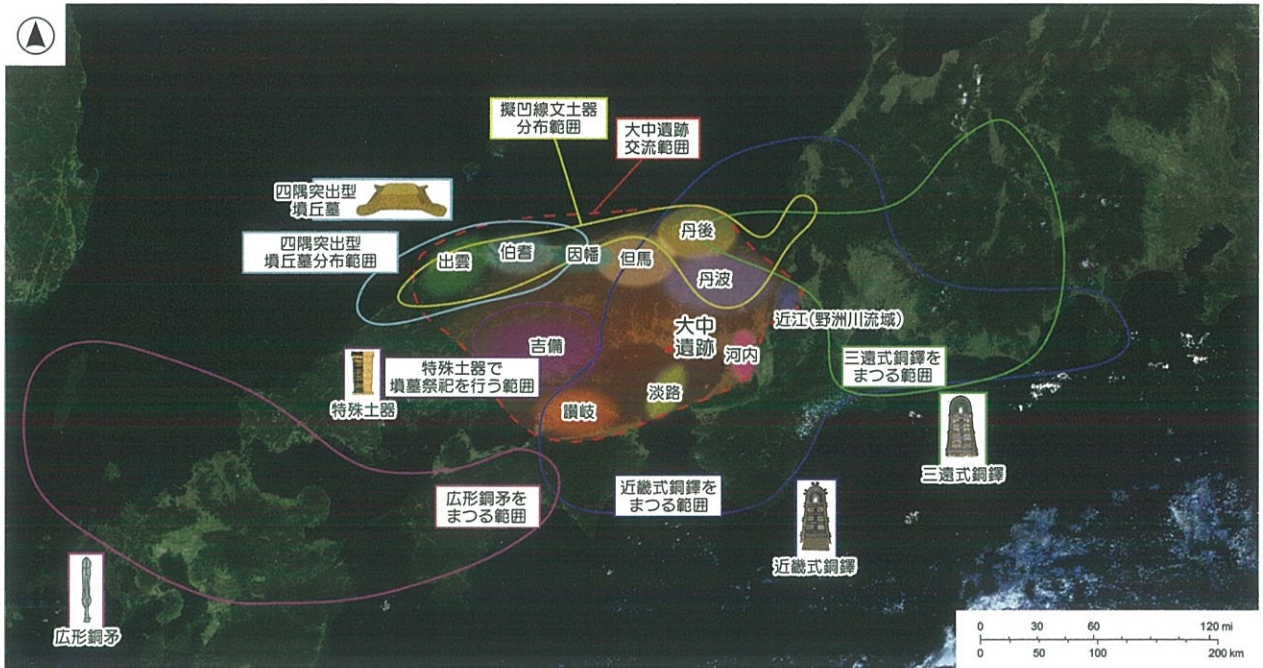


12-5 河内



12-6 近江(野洲川流域)

### 12 他地域との交流を示す土器



13 弥生時代後期における大中遺跡の交流域と祭祀形態の分布  
 (国土地理院 地理院地図GSI Maps, 寺沢薫 弥生時代後期の祭祀「王権誕生」をもとに作成)

### 土器の底面に残された「謎」

甕や壺の底面をよく見てみると、様々な線が刻まれています。その大半は底面にスタンプ状に押し当てられた結果生じた「圧痕」であり、木の葉のスタンプは「木葉痕」、米などの穀物のスタンプは「脱粒痕」などと言います。これには様々な要因があり、土器を製作する上での過程の一つであったり、土器製作時に偶然付いたものなどがあります。

しかし、中には意図的にヘラガキされたものが見られ、その意味について検討が重ねられています。



14 土器底面の様々な痕跡

# 播磨町の文化財保護活動

播磨町郷土資料館では文化財保護活動として、埋蔵文化財発掘調査、郷土史・民俗・産業資料の調査及び寄贈・寄託受入、文化財の修復等、多岐にわたる業務を行っています。それら活動の一部を紹介します。

## ■ 埋蔵文化財調査 「古代の大中<sup>すきあと</sup>で動物の足跡発見！」

大中遺跡<sup>すきあと</sup>南側の田園地帯を発掘調査した際に、奈良～平安時代のもと考えられる多数の動物の足跡が発見されました。また鋤痕<sup>すきあと</sup>と考えられる工具痕も同時に発見され、その検出状況<sup>ひづめ</sup>と蹄の形状から牛と推定されます。当時の大中<sup>すきあと</sup>一帯は低湿地帯であり、沼地のようにぬかるんだ地形を生かし水田などの農耕が営まれ、牛は土を耕したりするための役牛<sup>えきぎゅう</sup>として利用されていたのでしょう。



15 動物の足跡(遠景)



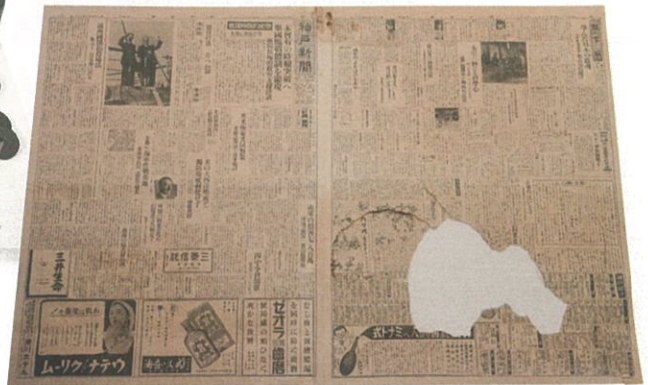
16 動物の足跡(近景)

## 寄贈 近代期土山駅前賑わいを物語る「煎餅店佐伯商店の資料」

土山駅北側メインストリート沿いで営業されていた煎餅店「佐伯商店」で使用されていた道具類です。煎餅型には「富士山」、「方形」、カステラ型には「菊」、「栗」などがあり、当時の製造方法や販売されていた菓子の形態がうかがえる資料です。煎餅の保管箱には昭和16（1941）年11月10日発刊の神戸新聞が入れており、太平洋戦争へ突き進む中で新聞報道がプロパガンダとなっていたことを示す貴重な資料です。



17 煎餅店「佐伯商店」道具類



18 煎餅の保管箱に入っていた新聞紙

## 寄贈 「戦時中に使用されていた水筒とカーバイトランプ」

戦時中の昭和10年代後半（1940～45年代頃）のものと同定されます。カーバイトランプとは、カーバイト（炭化カルシウム）を燃料としており、そこに水を加えることで発生する可燃性のアセチレンガスに点火させ使用するランプです。このランプは日常生活における携帯ライトとして使用されていました。



19 水筒(右)とカーバイトランプ(左)

## 寄贈 貴重資料!「別府鉄道資料」

別府鉄道は、株式会社多木製肥所（現：多木化学株式会社）が自社製品の肥料を運搬するために大正 10（1921）年～昭和 59（1984）年に操業していた私有鉄道です。国鉄（現：JR）野口駅～別府港駅を結ぶ野口線、国鉄（現：JR）土山駅～別府港駅を結ぶ土山線がありました。本資料は、元職員のご家族より、車掌帽、保線区帽などを良好な保存状態で寄贈をいただきました。



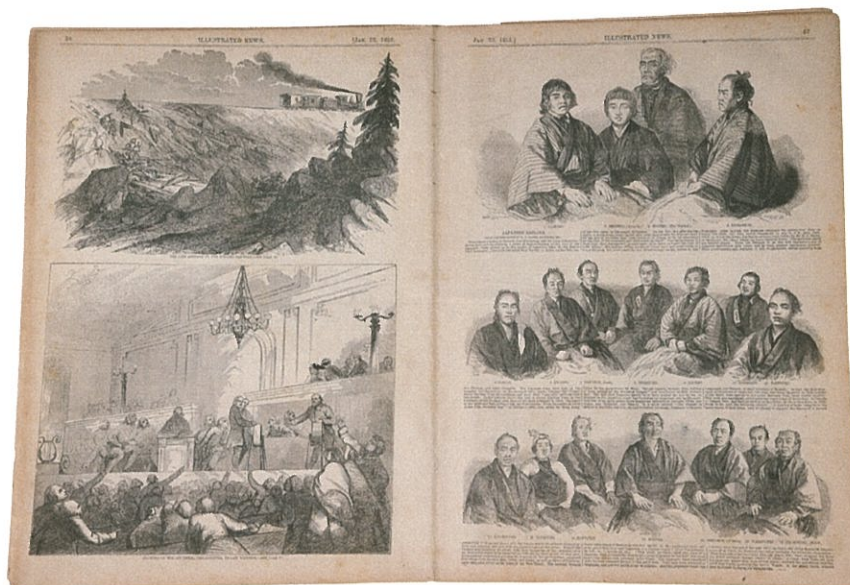
20 別府鉄道資料(左から保線区帽、車掌帽、切符)

## 寄贈 町指定文化財を補完する新資料!

### 「ジョセフ・ヒコ関連資料 イラストレイテッド・ニュース」

イラストレイテッド・ニュースは、ニューヨークで発刊された週刊絵入り新聞です。嘉永 3（1850）年にジョセフ・ヒコこと濱田彦蔵らが遭難時に、アメリカ船オークランド号に救助され、サンフランシスコに到着した際のことを、本紙（嘉永 6（1853）年 1 月 22 日刊）に、漂流日本人として掲載されました。

播磨町として本紙同日刊の一部のみが町指定文化財に指定されていますが、本資料はこれを補完するものとして大変貴重な資料です。



21 イラストレイテッド・ニュース(漂流日本人掲載ページ)

# 浅原重利氏を偲ぶ



22 浅原重利氏と大中遺跡(提供:神戸新聞社)

## プロフィール

昭和22(1947)年		生誕
昭和37(1962)年	15歳	大中遺跡を発見
昭和40(1965)年	18歳	山之上遺跡を発見
昭和51(1976)年	29歳	播磨町大中にて歯科医院を開業
昭和60(1985)年	33歳	播磨町文化財保護審議会委員に就任
平成2(1990)年	43歳	『播磨大中遺跡の研究』の編纂に参画
平成5(1993)年	46歳	播磨町文化財保護審議会会長に就任(~令和6(2024)年)
平成13(2001)年	54歳	播磨町ふるさとの先覚者顕彰会会長に就任(~令和6(2024)年)
令和7(2025)年	78歳	永眠

大中遺跡発見者の一人であり、文化財保護審議会会長や播磨町ふるさとの先覚者顕彰会会長を長年務め、大中遺跡まつり開催に深く関わるなど、播磨町の文化財保護・啓発に多大に貢献された浅原重利氏が今春永眠されました。享年78歳でした。

生前、浅原氏は自身を「大中遺跡の防人(さきもり)であり、語り部である」と語っておられたとおり、大中遺跡発見から現在まで大中遺跡の保護・活用に注力され、その生涯を大中遺跡と共に生きてこられました。その生き様は、正に唯一無二の「防人」であり「語り部」でした。大中遺跡研究においても、墓域や生産域など当遺跡の未解明な問題には、播磨町郷土資料館への協力や議論を惜しまず熱心に取り組んでおられました。また、新井用水はじめ郷土史にも関心を持たれており、郷土愛を育む場の必要性を提言されるなど、播磨町に関わる全ての文化財や郷土史にまで及ぶ浅原氏の見識の広さを示してくださいました。

浅原氏が傾けられた大中遺跡はじめ播磨町の文化財への強い意志と情熱は、後進の私たちに多大なる影響を与え、それは確実に受け継がれています。そして私たちは全力で取り組み、未来へ継承させてまいります。浅原氏のご尽力に改めて敬意と感謝の意を表するとともに、今後の播磨町文化財保護・啓発活動の発展を天より見守ってくださることを切に願ってやみません。

浅原重利氏のご冥福を心よりお祈りいたします。

# 大中遺跡との出会い —その発見の経緯—

大中遺跡発見の年、昭和37年、世はまさに宇宙時代を迎えていた。前年にソ連のガガーリン少佐が人類史上初の宇宙飛行を行い、この年アメリカも負けじとばかり、グレン中佐がフレンドシップ号で宇宙飛行。日本国内では堀江謙一青年が小さなヨットで太平洋を一人ぼっちでアメリカへ渡航。日本の経済成長も、日々加速度を増している。昭和37年はそんな年であった。

筆者達3人、大辻真一<sup>おおつじしんいち</sup>、大辻要二<sup>おおつじようじ</sup>、そして筆者は、生まれも育ちも播磨町大中で、物心ついた時からの幼なじみで、遊びも通学もいつも行動を共にしていた。そんな3人が中学に進学して初めて日本史を学ぶことになった。担任は現播磨町教育長の藤原年春先生<sup>ふじわらとしはる</sup>。2年生の夏休み、何か自主的に課題をもって勉強せよ、とのことで、私達3人は相談の結果、加古川市内の古墳のレポートを書くことにした。その頃刊行された、神戸新聞社刊、「祖先のあしあと」を手引きにして、加古川市内に点在する古墳を自転車にまたがり、見て廻った。本で見るのとは違い本物の古墳に接した時の感動は未だに記憶に残っている。そしてそれらの古墳の様子をレポートにまとめて、夏休み明けに提出した。その時、中学生としてはよくやった、と藤原先生に大変ほめて頂き、金賞を得た。子供心は単純なもので、それを契機に急傾斜で考古学に興味をもっていったと思う。当時は考古学関係の書籍は私達の身近になく、中学校の図書室にもほとんどなかった。考古学に関するどんなささいなことでも載っている本を目を皿にして捜し、新聞の記事を必死にスクラップした。休日になれば自転車にまたがって、古墳、遺跡をめぐり、遠く、姫路市、加西市まで足を延ばした。

今から思えば、大きな弥生遺跡の眠っている大中の台地の横を、それとは知らず、自転車で通っていたのである。そんなある日、地元の古老から大正年間に大中地区の北に横たわる台地、地元では大増畑<sup>おおぞうばた</sup>と呼ばれる畑地に、別府鉄道が敷設された時に、「タコツボ」が大量に掘り出されたことを聞いた。その当時畑地は約半分が工場用地として整地されたまま放置されており、私達地元の子供には絶好の遊び場になっていた。さっそく3人で行ってみる。台地西端の住吉神社の南側に土砂の採掘跡があった。よく見ると廻りに土器片が大量に散布している。しかし悲しいかな当時の私達には弥生式土器と判断する知識は持ち合わせていなかった。漠然と古い土器として毎日のように学校から帰ると採集していた。私達の「秘密」であった。

しばらくして、整地された工場用地にも多量に土器が散布していることを発見し、その密度の大きい場所を掘ってみると大変な量の土器が埋っており、夢中で掘り出した。気がつけば大きなダンボール箱に何杯も掘り出していた。後から判ったことであるが、偶然にも土器群<sup>どきぐん</sup>のまん中を掘り当てていたのであった。そんな時、たまたま新聞で高砂市の阿弥陀町豆崎<sup>あみだちょうまめざき</sup>で、古墳が発掘調査されているのを目にし、さっそく3人で自転車で出かけた。今思えば、後期古墳の横穴式石室の実測が行われていたのであるが、おそろおそろ覗きこんで見た時の驚きは大変なものであった。石材、出土品が丹念に、精密の一つずつ実測されているのである。大きなショックであった。3人は相談して、ついに「僕らの秘密」を打ち明けることにした。これも後から知ったことであるが、この豆崎の古墳の発掘を担当されていたのは、後々大中遺跡の発掘に大変尽力される上田哲也先生<sup>うえだてつや</sup>であった。本当に何か運命づけられた縁を感じる。

当時大辻要二君の兄が加古川西高校<sup>かこがわにし</sup>に在学されており、そのこの歴史の先生が大変考古学に詳しいと聞き、さっそく連絡をつけて下さった。すぐ石橋逸郎先生<sup>いしばしいつろう</sup>が駆けつけて来られた。一目土器を見るなり、弥生式土器と鑑定され、

それからが、大騒ぎであった。播磨町という小さなまちの、大中という小さな地区に弥生時代の大遺跡が発見されたのである。

新聞に大きく取り上げられ、私達3人は“時の人”になり、ことの大きさにただおののくばかりであった。

さっそく、大中地区の善福寺ぜんぶくじに採集遺物が保管され、住職の中嶋仁道先生なかしまじんどう（現播磨町文化財保護審議会々長）が県教委におられた関係で、先生の尽力で速やかに遺跡発見届けが出された。県からすぐに専門官が派遣されて来た。遺跡の名称が決まる。“大中遺跡”。そして私達3人の“秘密の遺跡”は手元を離れていった。

昭和37年12月、第1次発掘調査が始まる。徐々に大中遺跡がその姿を見せはじめる。私にとって大きな感動であった。私も第1次調査よりたびたび調査に参加させて頂き、中学、高校へと経年の中で、考古学の知識を育むとともに、すばらしい先輩、友人を得ることができた。心身とも充実した青春そのものであった。

ある先生が言われた。「いい名前のつけられた遺跡は大成する」と。まさに大中遺跡は“いい名”であり、運が強く、多くの人々の努力と愛情に恵まれ、開発の波を乗り越え、今日に至った。史跡に指定された時、古代の村としてオープンの時、そして播磨町郷土資料館の開館、私はいつも大中遺跡とともに居た。あの“秘密”を共有した3人はそれぞれの道へ別れていった。筆者は歯科医となり、縁あって、大中の地で歯科医院を開業している。

大中遺跡発見の中学生も今や不惑の年、髪に白いものが混じり、子供は高校1年生である。

しかし、土くれの中から、土器片を見出した少年時代の喜び捨てがたく、日々診療に勤しみながら、遠い古代へと夢を馳せている今日この頃である。（浅原重利）

（播磨町教育委員会 1990「第1章 大中遺跡の歩んだ道」『播磨大中遺跡の研究』より）

## ま と め

本展では、大中遺跡出土遺物の見直し作業においてもたらされた新発見に重点を置き紹介しました。

絵画・記号土器について大中遺跡は、県内有数の発見例を誇る遺跡となりました。これは近年における詳細な見直し作業の成果と言えるでしょう。その中には「龍」を想起させるものが一定数含まれており、当時の人々の制水に対する苦悩が垣間見える資料となりました。また、他地域での生産やその系譜を組む土器が複数確認されました。

大中遺跡研究は、60年を越える年月を世代交代しながら続けられ、その水準を高めつつ今日も行われています。今後も関係機関と連携を図りながら、様々な手法を活かし、大中遺跡の「謎」を解明していく所存です。

大中遺跡は昭和37（1962）年の発見以来、保護、調査、研究、啓発がなされ、昭和42（1967）年国史跡に指定され整備されてきました。昭和60（1985）年にガイダンス施設としての播磨町郷土資料館が、平成19（2007）年には兵庫県立考古博物館が開設されるなど、発見から63年を経た今日では県内随一の歴史学習拠点となっております。これは自明のこととして、大中遺跡に関わった多くの人々の尽力があったからこそその成果と言えます。

播磨町内には大中遺跡をはじめ、多くの貴重な文化財が存在します。現在の私たちは、先人から受け継いだこれらの文化財の価値を知り、保護・活用し、未来へ継承していかなければなりません。「今」と「昔」が巧みに共存できる播磨町を目指し、これからも文化財保護啓発活動まいしんに邁進してまいります。

# 考古学年表

◎:国指定 ○:県指定 △:市・町指定

年代	時期区分	播磨町・播磨地域の主な遺跡など
3万年前	旧石器時代	藤江川添遺跡(明石市)
	前期	西八木遺跡(明石市)
	中期	△大中遺跡(播磨町)・山之上遺跡(加古川)／石器
B.C14000	後期	西脇遺跡(明石市)
B.C7000	縄文時代	草創期
B.C4000	前期	○福本遺跡(神河町)
B.C3000	中期	△大歳山遺跡(神戸市)
B.C2000	後期	丁・柳ヶ瀬遺跡(姫路市)
B.C1000	晩期	片吹遺跡(たつの市)
B.C600	(早期)	日笠山貝塚(高砂市)
B.C300		今宿丁田遺跡(姫路市)
A.D.1	弥生時代	新方遺跡(神戸市)
	前期	美乃利遺跡(加古川市)
	中期	玉津田中遺跡(神戸市)
300	古墳時代	養久山・前地遺跡(たつの市)
		◎大中遺跡 住居／土器
		西条52号墳(加古川市)
400	前期	○養久山1号墳(たつの市)
	中期	◎丁瓢塚古墳(姫路市)
	後期	◎古島古墳(たつの市)
500	前期	◎西条古墳群(加古川市)
	中期	◎五色塚古墳(神戸市)
	後期	◎石の宝殿及び亀山石採石遺跡(高砂市)
600	後期	○西宮山古墳(たつの市)
	飛鳥時代	平荘湖古墳群(加古川市)
	奈良時代	◎鶴林寺(加古川市)
700	飛鳥時代	◎播磨国分寺跡(姫路市)
	奈良時代	古大内遺跡(加古川市)
	平安時代	○西条廃寺(加古川市)
800	平安時代	太寺廃寺(明石市)
	鎌倉時代	魚住古窯址群(明石市)
	室町時代	福田片岡遺跡(たつの市)
900	平安時代	◎鶴林寺本堂(加古川市)
	鎌倉時代	◎白旗城跡(上郡町)
	室町時代	城山城跡(たつの市)
1000	鎌倉時代	◎感状山城跡(相生市)
	室町時代	◎置塩城跡(姫路市)
	戦国時代	本荘蓮花寺構居跡 濠跡／青磁など
1100	戦国時代	◎姫路城跡(姫路市)
	安土桃山時代	◎明石城跡(明石市)
	江戸時代	今里傳兵衛／新井用水
1200	江戸時代	◎高砂堀川湊及び 工業松右衛門旧宅(高砂市)
	近代・現代	◎高砂堀川湊及び 工業松右衛門旧宅(高砂市)
	近代・現代	ジョセフ・ヒコ／新聞発行
1300	近代・現代	◎播州葡萄園跡(稲美町)
	近代・現代	別府鉄道／開通
	近代・現代	

The Onaka ruins

特別展

## 大 中 遺 跡 の 新 発 見

— 継承されていく大 中 遺 跡 研 究 —

令和7(2025)年10月4日発行

編集・発行 播磨町郷土資料館

〒675-0142

兵庫県加古郡播磨町大 中 1-1-2

TEL 079-435-5000

FAX 079-436-0135

印刷:ハリマニックス株式会社



[ホームページ]